

HTVで届けられ、野口宇宙飛行士が育てた アート 芸術としての「宇宙庭」

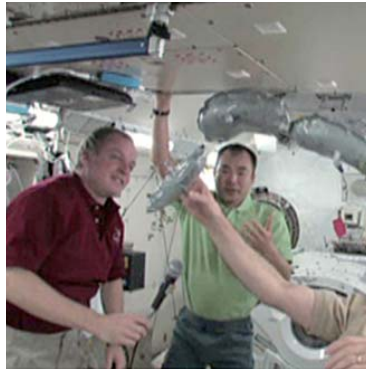
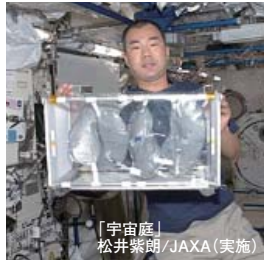
「きぼう」文化・人文社会科学利用パイロットミッションの一端として実施された「宇宙庭」に、代表提案者の松井紫朗教授は《デューイズ・フォーレスト》と名付けた。地上の緑が潰えた未来が舞台の映画『サイレント・ランニング』で、“森”の世話をするけなげなロボット、デューイにちなんだもの。映画での“森”は太陽から遠く離れ、照度不足に苦勞するが、今回のプロジェクトの「宇宙庭」も「きぼう」にある照明だけで育てるといって、限られたリソースで行われた。その目的は食糧生産技術でも生物実験でもなく、「庭を作る」こと。単なる癒し効果だけでなく、アートとしての狙いをもつ。ISSに庭があることにより、多様な文化的背景をもつ宇宙飛行士たちは何を感じるか。そうした語らいこそが重要だと松井教授は考えた。

着想の発端は日本人宇宙飛行士との対話（京都市芸大とNASDA/旧・宇宙開発事業団との共同研究として実施）だった。「土井隆雄宇宙飛行士は、初めてのミッションで感じた無重力空間の居心地の悪さが、ボールを投

げるという営みで一気に解消したと言っていました。上下のない宇宙でもボールの飛ぶ方向が下だと感じられたからだそうです。若田光一宇宙飛行士も、スペースシャトルに搭乗するたび、『ミッドデツキってこんなに狭かったのか』と驚いたそうです。すべての壁面が使い、空間を立体的に移動するの

が当たり前だった世界を経験しているからですね」
重力のある世界については気づかなかったことに目を開かされた。松井教授は、自身が創作してきた彫刻をはじめ、時間や空間にかかわるあらゆる芸術表現が、重力に大きく制約されていたこと

栽培キットは①水耕栽培用の特殊なフィルムに水を蓄え②不織布に種子を埋め込んで③表面をマルチという農業用シートで覆う三層構造。これを4つ用意し、玄武・朱雀・青龍・白虎と、方角を示す四神を識別名とした。約2か月の栽培の後、4つのユニットを、「きぼう」にて野口聡一宇宙飛行士と2名の宇宙飛行士たちが、思い思いにつないで庭として完成させた。種子の種類はオニタピラコ・カタバミ・ヤブミョウガ・ヘイチゴ・ムラサキサギゴケ・ナデシコ・セイヨウタンポポ・ムギセンノウ・レモンバーム・ペパーミント・ピンクケール・コリウス。うまく芽が出たものも、そうでないものもあった。



を詳述した)の昔から、造庭に精魂を注いできました。空間を築山や小道で区切ることで、回遊する客に視点の変化を体験し愉しんでもらおうとしてきたわけです」

「庭は、それを持たない文化はないと言われるほど普遍的な存在です。日本でも『作庭記』（平安時代。寝殿造りの造庭について、立石・島・池・河・滝などの次第

たたとえば鹿苑寺(金閣寺)の庭園を歩いてみれば、金箔の輝きだけが人を集めているのではないことがわかる。水面に映る舍利殿の背後に回り、築山を登る小道を歩くと、刻々と変化する景色が新鮮な驚きをもたらす。最後には木々の間から見え隠れする舍利殿の頂の鳳凰に、立ち去りがたささ感じてしまうほど。庭園とは時間と空間の芸術であるという表現に納得がいく。

「私自身驚いているのは、紆余曲折がありながら、最初に思い描いたイメージがほとんどそのままの形で実現したことです。限られた時間の中で印象や感想を話し合うのは難しいことだったと思いますが、協力してくださった宇宙飛行士はじめ、宇宙機関の皆さんに感謝しています。帰還後にまたヒアリングできる機会があれば期待しています」

宇宙での造庭と鑑賞の体験は、どのように人間の心に影響を与えたのか、さらなる報告を待ちたいところだ。

（文／喜多充成）



松井紫朗
MATSUI Shiro
京都市立芸術大学准教授
「プロジェクトが動き始めてからのことですが、子どもの頃、牧野富太郎の植物図鑑で、植物の名前の由来を面白く見ていたことを思い出しました。ハスはハチの巣、スマイレは大工道具の墨入れが由来とか。種の名前はわれわれにとっては透明な記号に過ぎないのに、名付けた人の想いがそこに見えてくるようで楽しかったですよ」